

有機ELの研究施設開設

次世代の発光材として注目

九大隣接地

財団法人「県産業・科学技術振興財団」は、薄型テレビのディスプレイや照明などに使う有機EL（エレクトロ・ルミネッセンス）の研究施設「有機光エレクトロニクス実用化開発センター」を福岡市西区に開設した。

九州大が、高価なレアメタル（希少金属）を用いない安価な有機EL新素材の開発に成功しており、センターではこの基礎研究成果を踏まえ、数年以内の実用化を目指す。

有機EL素材は、軽量で、変形が容易なため、次世代の発光材料として有望視されている。希少金属のイリ

ジウムや白金などが必要なため高コストが課題だが、九州大の安達千波矢教授のグループは、材料コストを10分の1に抑えられる新たな有機化合物の発光材料を開発した。

同センターは、九州大伊都キャンパスの隣接地に今月1日に開設された。安達教授がセンター長を務め、同財団や照明機具会社などから来た十数人が、実用化に向けた研究を始めている。

九州大が開発した新素材を活用してパネルなどの試作品製作や、耐久性などの性能を調べる。総事業費約8億9500万円。うち県

が約2億1600万円を補助した。

小川知事は「県の発展のためには、最先端分野を切り開き、産業として発展させていくことが大切。福岡が研究開発、産業の拠点となるため、努力していきたい」と話している。